高崎市文化財調査報告書第343集

石原清水下遺跡

－分譲住宅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2015

株式会社横尾材木店
株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

石原清水下遺跡

二〇一五

株式会社横尾材木店　株式会社シン技術コンサル　高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第 343 集

石原清水下遺跡

－分譲住宅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2015

株式会社横尾材木店
株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

例　言

1．本書は分譲住宅工事に伴って実施された「石原清水下遺跡」（高崎市遺跡番号 613）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡の所在地は、群馬県高崎市石原町字清水下 1999 番地・2001 番地 1 である。

3．発掘調査は平成 26 年 10 月 27 日から平成 26 年 11 月 5 日まで、整理作業は平成 26 年 11 月 6 日から平成 27 年 3 月 31 日までそれぞれ実施した。

4．発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を結んだ株式会社シン技術コンサルが実施した。

5．調査体制は以下のとおりである。

　高崎市教育委員会　田口一郎、田辺芳昭、滝澤　匡

　株式会社シン技術コンサル　福嶋正史（調査担当）、志村将直（測量担当）

6．本書の編集は福嶋正史・坂本勝一（株式会社シン技術コンサル）が行った。執筆は第 I 章を田口、他を福嶋が行った。

7．本調査における図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。

8．発掘調査及び整理作業・報告書作成に従事した作業員は以下のとおりである。（敬称略・五十音順）

　発掘調査

　青山真佐子、飯塚時司、木暮シズイ、佐藤博士、樋口久雄、矢島　巌、山田幸枝、山田利行、蓬田保伯

　整理作業・報告書作成

　坂本勝一、佐藤久美子、中里洋子、吉田瑠美子

9．出土遺物の写真撮影は、山際哲章（studio foglia）が行った。

10．発掘調査及び本書の刊行にあたり、下記の方々、諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（敬称略・五十音順）

　細谷印刷有限会社

　大西雅広・小野和之・早田　勉・日沖剛史・三浦京子

凡　例

1．本書の掲載図に使用した地図は、第 1 図が国土地理院発行 1/50,000 地形図『高崎』・『富岡』、第 2 図が高崎市発行 1/2,500 都市計画図、第 4 図が国土地理院発行 1/25,000 地形図『高崎』・『富岡』である。

2．遺構配置図の座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用した。また、遺構平面図に示した方位は座標北で、遺跡の中央部における真北との偏差（真北方向角）は＋ 0°29′52″（N-0°29′52″-E）である。

3．土層及び土器の色調は『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所色票監修 2005 年版）による。

4．本書に示した火山噴出物の名称は、浅間Ａ軽石（As-A、天明三年（1783）降下）及び、浅間Ｂ軽石（As-B、天仁元年（1108）降下）である。

5．遺構の表記は略号を用いた。竪穴住居：SI、土坑：SK、畑：SY、不明遺構：SX である。

6．写真図版における遺物写真の縮尺は、遺物実測図とほぼ同一とした。

7．本書では土器、陶器の実測図断面は、還元焔焼成を黒塗り、酸化焔焼成を白抜きで、陶器にはトーンを用いた。

■還元焔焼成　□酸化焔焼成　■陶器

目　次

例　　言
凡　　例
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 2
第Ⅲ章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第Ⅳ章　基本層序 …… 6
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物 …… 8
　（１）竪穴住居（SI） …… 8
　（２）土　　坑（SK） …… 10
　（３）不明遺構（SX） …… 11
　（４）畑　　跡（SY） …… 12
　（５）遺構外出土遺物 …… 13
第Ⅵ章　調査の総括 …… 14
　石原清水下遺跡の継続年代について …… 14
写 真 図 版
報告書抄録

挿図目次

第１図　石原清水下遺跡位置図 …… 1
第２図　石原清水下遺跡発掘調査区域図 …… 2
第３図　高崎市域周辺の地形区分図 …… 3
第４図　周辺の遺跡位置図 …… 5
第５図　基本土層柱状図 …… 6
第６図　遺構全体図 …… 7
第７図　SI01 平・断面図 …… 9
第８図　SI01 出土遺物図 …… 10
第９図　SK01 平・断面図・出土遺物図 …… 10
第10図　SX01 平・断面図・出土遺物図 …… 11
第11図　SY01 平面図・出土遺物図 …… 12
第12図　遺構外出土遺物図 …… 13
第13図　石原清水下遺跡　平安時代出土遺物図 …… 14

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表（１） …… 4
第２表　周辺遺跡一覧表（２） …… 5
第３表　出土遺物観察表 …… 13

写真図版目次

PL. 1　調査区遠景
PL. 2　調査区全景
PL. 3　調査前現況
PL. 4　調査区全景
PL. 5　SI01 土層断面・遺物出土状況・カマド土層断面Ｂ・使用面全景
PL. 6　SK01 土層断面・全景、SX01 土層断面・遺物出土状況・全景、SY01 全景
PL. 7　SI01・SK01・SX01・SY01・遺構外出土遺物

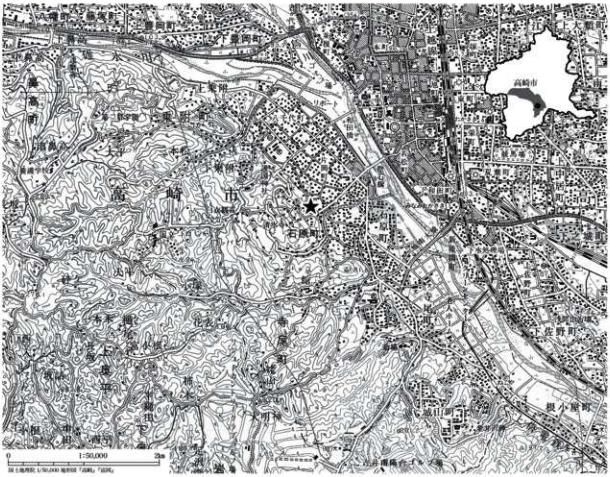
第Ⅰ章　調査に至る経緯

平成 26 年 5 月、株式会社横尾材木店（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に分譲住宅造成工事予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査による確認を実施し工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 6 月 2 日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 9 月 2 日に工事予定地の試掘調査を実施し、平安時代～中近世の遺構・遺物を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということなので、開発予定地の内道路建設部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、株式会社シン技術コンサル北関東支店に委託して実施することとなり、平成 26 年 10 月 17 日付けで高崎市教育長・事業者・シン技術コンサルにより三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 26 年 10 月 17 日付けで事業者とシン技術コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。



第 1 図　石原清水下遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の方法と経過

石原清水下遺跡は分譲住宅地建設に伴う道路敷地部分 181.42㎡を調査対象地とし、平成 26 年 10 月 27 日から平成 26 年 11 月 5 日にかけて発掘調査を実施した。調査面は 1 面で、調査対象地は分割することなく一度に全域の調査を行った。調査は 0.2㎥のバックホウを使用して厚さ約 30cm の表土を除去し、調査対象地に近接した事業用地内に直接排土して運搬の省力化を図った。表土を除去した後、ジョレン・移植ゴテなどを用いた人力による遺構確認作業を行った。遺構確認面はⅡ層の上面である。これによって検出された遺構は、移植ゴテなどで細掘・精査した。なお、表土除去から遺構掘削までの作業はいずれも基本的に調査対象地の東側から着手し、西側へと順次進めた。なお、工事工程との関係で排土の埋め戻しは行っていない。

写真記録は 35mm 及び 6×7 判のモノクロフィルム、6×7 判ネガカラーフィルムの他、デジタルカメラによる補足撮影を行った。また、全ての遺構調査が終了した段階でラジコンヘリコプターによる 6×6 判モノクロフィルム及びデジタルカメラによる空中撮影を実施し、調査対象地及び周辺の地形景観を撮影した。

調査対象地のグリッド設定は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系の座標軸を用いて 5 m間隔の方眼を設定し、作図作業は断面図を人手によるオフセット測量、平面図を光波測距儀による器械測量で行った。なお、調査対象地が狭小なことからグリッド名は付せず、X・Y 軸の座標値をこれに替えた。

調査の経過は下記の通りである。

平成 26 年

10 月 27 日　重機による表土除去。遺構確認作業。試掘調査で確認された遺構及び畑跡検出。東端の撹乱部掘削。休憩施設、器材置き場、駐車場整備。

10 月 28 日　遺構確認作業及び東端の撹乱部掘削。1 号住居平面プラン確認。

10 月 29 日　遺構確認作業で住居及び重複する 1 号不明遺構、土坑を検出。東半部の畑跡とともに掘削開始。

～ 30 日　土坑完掘、土層断面計測、写真撮影。

10 月 31 日　1 号住居土層断面計測、遺物出土状況写真撮影、1 号不明遺構遺物計測、完掘、写真撮影。東半部の畑跡完掘、写真撮影。土坑、畑跡平面計測。

11 月 4 日　1 号住居完掘、平面計測、写真撮影。西半部畑跡完掘、写真撮影。遺構掘削、計測作業終了。器材搬出。

11 月 5 日　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。

第 2 図　石原清水下遺跡発掘調査区域図

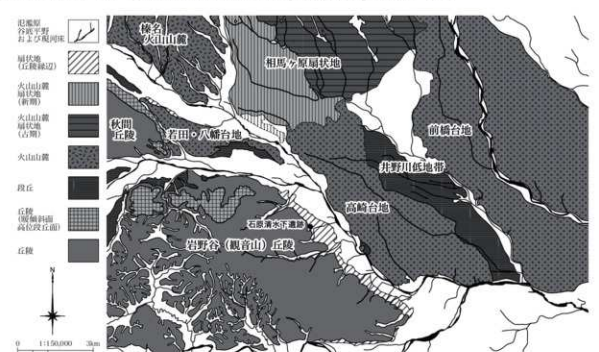
第Ⅲ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

石原清水下遺跡は群馬県高崎市石原町に所在し、ＪＲ高崎駅から一級河川烏川を挟んだ南西約２km に位置する（第１図）。この遺跡が所在する高崎市は群馬県の南西部で、大きくは関東平野の北西端部にあたる。群馬県の中央部には標高 1,449 m の榛名山が標高 1,828 m の赤城山と対峙し、この間を県北部で新潟県との県境付近の山塊を水源とする利根川が南流して、前橋市付近から南東方向へ流路を変えている。一方、県西部の長野県境付近の山地を水源とする烏川は、同じく長野県境付近を水源とする碓氷川と高崎市街地の西側で合流し、高崎市の東側に位置する佐波郡玉村町の東端部付近で利根川と合流する。遺跡は烏川の右岸側で丘陵地に近接した緩斜面に広がる住宅地の一画にあり、調査地中心部の標高は約 99 m である。調査対象地は分譲住宅地建設に伴う道路敷地部分で、東西約 35 m、南北約５m のほぼ東西に細長い範囲である（第２図）。

遺跡は烏川と碓氷川の合流点から、南側に約 1.5km の烏川右岸に位置する。この周辺は高崎市街地の西側に広がる岩野谷丘陵（観音山丘陵）と、碓氷川から烏川の縁辺部にかけて形成された扇状地が接する位置にあり（第３図）、扇状地部分は主として住宅地として利用されている。岩野谷丘陵は、高崎市の西側に位置する安中市方面から烏川の縁辺部にかけて連なる長さ 16km、幅７km ほどの丘陵地で、尾根の標高は 200 m～250 m である。約 800 万年前の「板鼻層」で形成され、全体的に丘陵の奥深くまで河川によって浸食されて狭い尾根と急崖が多い（中村 2003）。石原清水下遺跡は、この丘陵地の東端部から東側の碓氷川、烏川にかけて形成された扇状地上に位置する。この扇状地は丘陵地に接する西端部から碓氷川、烏川にかけて東側に傾斜し、遺跡周辺の扇状地西端部と烏川縁辺部の比高は約 10 m で、平均的な勾配が約１％の緩斜面である。遺跡はこの扇状地の西端部で、岩野谷丘陵との接点付近に立地している。

引用文献　中村正芳　2003『高崎市域とその周辺地域の地形区分』『新編高崎市史』通史編１　高崎市



第３図　高崎市域周辺の地形区分図

第２節　歴史的環境

本遺跡の周辺では発掘調査された遺跡が比較的少なく、本遺跡の主たる年代である平安時代の遺跡は現在までにほとんど知られていない。しかし、遺跡の南方約１km の寺尾地区では同時代の遺跡が確認されており、また周辺には古墳時代の墳墓なども存在する。本節では周辺地域における遺跡の分布状況について概観する（第４図）。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡の周辺では今のところ確認されていない。縄文時代の遺跡は図示した範囲内には存在しないが、遺跡の北西約３km の乗附長坂遺跡及び西北西 3.5km の大平台遺跡で集落が確認されている他、本遺跡の近接地でも土器の散布が確認されているようである。

弥生時代の遺跡は図示した範囲の碓氷川及び鳥川の右岸地域には存在しないが、鳥川左岸の高崎市街地周辺では竜見町遺跡（29）が群馬県下における中期後半の土器の標識遺跡として広く知られる他、東町Ⅲ・Ⅳ遺跡（22・23）で水路が、高崎城遺跡（25）で集落が確認されている。

古墳時代の集落は、寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（12）及び寺尾館台・寺尾左近遺跡（13）で確認されている。墳墓では遺跡の南東約 800 m付近で石原稲荷山古墳（６）、石原坊主山古墳（７）、天王（皇）塚古墳（８）、三島塚古墳（10）が、南南東 1.8km 付近の寺尾地区には姥山古墳（図外）、大塚古墳（図外）、桜塚古墳（15）が、北西約 2.2km の乗附地区では鶯塚古墳（２）、御部入古墳群（３）、高崎１号墳（４）がそれぞれ存在する。

奈良・平安時代では、遺跡の東南東約 900 mの石原東半田遺跡（９）で天仁元年(1108) の浅間Ｂ軽石(As-B) 直下の水田が、南方１km 付近の寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡及び寺尾館台・寺尾左近遺跡で集落が、南南東 1.8km の石原鶴辺団地Ⅰ・Ⅱ遺跡（14）で集落などが確認されているが、図示した範囲の碓氷川・鳥川右岸地域では今のところ分布例が限られている。

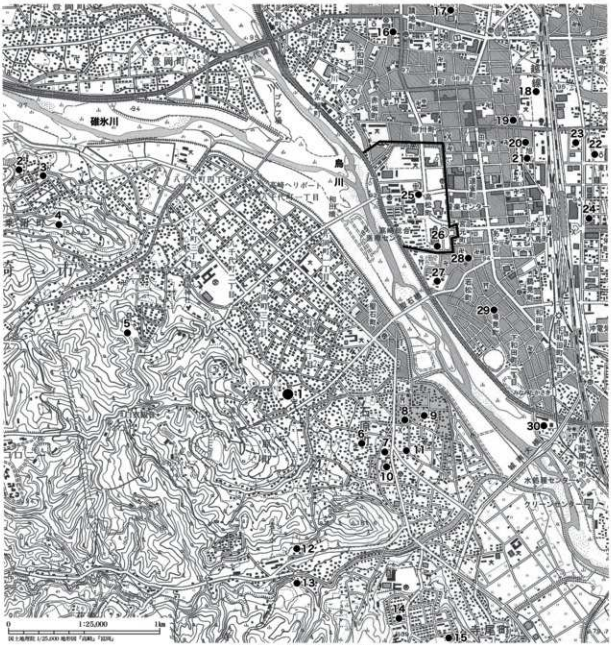
中・近世では遺跡の南方約１km 付近の寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡で中世の館、近世の礎石建物が、寺尾館台・寺尾左近遺跡で中世の火葬跡などが確認されている他、鳥川左岸の高崎市街地周辺では高崎城遺跡をはじめとして中・近世の城郭遺構及び関連する遺構が確認されている。

以上、石原清水下遺跡に近接する範囲では遺跡の分布が少なく、遺跡の主たる年代である平安時代の遺跡の分布も限られている。これは周辺における開発行為の多寡に起因する可能性も考えられるが、そうした意味で本遺跡の調査例は近接地域における遺跡の分布状況を考える上で示唆的な資料を提供したと言えよう。

第１表　周辺遺跡一覧表（１）

※「　」の数値は『上毛古墳綜覧』記載

№	遺跡名	主な時代・遺構	参考文献
1	**石原清水下遺跡**	平安時代住居・土坑・不明遺構、近世畑	本報告書
2	鶯塚古墳	円墳、径 14m、横穴式石室、7C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
3	御部入古墳群	古墳時代後・終末期の群集墳、６～8C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
4	高崎１号墳	円墳、径 40m、竪穴式石槨?、5C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
5	高崎 106 号墳	墳形・規模不明、石部	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
6	石原稲荷山古墳	円墳、径 30m、横穴式石室、6C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
7	石原坊主山古墳	方墳、26m、主体部不明、5C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
8	天王（皇）塚古墳	円墳、主体部不明	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
9	石原東半田遺跡	平安時代水田	『高崎市内遺跡理蔵文化財緊急発掘調査報告書』高崎市教委　1993
10	三島塚古墳	円墳、径 56m、石槨、5C	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
11	シブト塚古墳（千人塚）	円墳	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
12	寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡	古墳・奈良・平安時代集落、中世館、近世礎石建物	『寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』高崎市教委　1996
13	寺尾館台・寺尾左近遺跡	古墳・奈良・平安時代集落、中世火葬跡・溝	『寺尾館台・左近屋敷遺跡』高崎市遺跡調査会　1999・『寺尾左近屋敷Ⅱ遺跡』高崎市遺跡調査会　2003
14	石原鶴辺団地Ⅰ・Ⅱ遺跡	奈良時代集落	『石原鶴辺団地Ⅰ遺跡』高崎市教委　1991・『石原鶴辺団地Ⅱ遺跡他　埋蔵文化財展示業について　発掘調査概要』高崎市教委　1993
15	桜塚古墳	円墳、「21.6」m、主体部不明	『新編高崎市史資料編１原始古代Ⅰ』高崎市　1999
16	住吉町Ⅰ遺跡	平安時代水田等	『市内遺跡理文緊急発掘調査報告書』高崎市教委　1992



第４図　周辺の遺跡位置図

第２表　周辺遺跡一覧表（２）

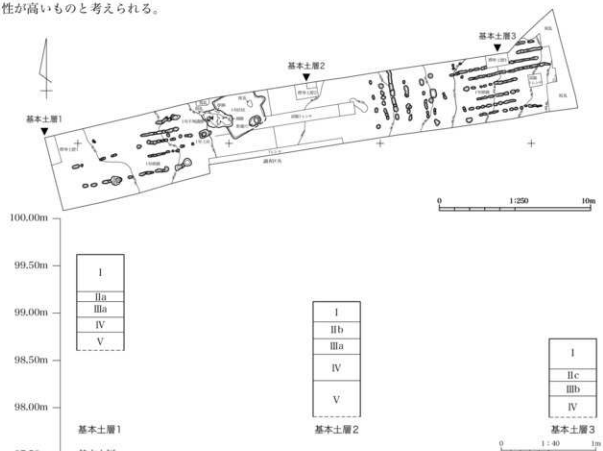
№	遺跡名	主な時代・遺構	参考文献
17	**昭和町１遺跡**	**平安時代水田、中・近世土坑**	**『昭和町１遺跡』高崎市遺跡調査会　1992**
18	**江木諏訪西遺跡**	**古墳時代溝、平安時代水田、近世溝**	**『江木諏訪西遺跡』高崎市遺跡調査会　1995**
19	羅漢町遺跡	近世城郭遺構（遺構）、近・現代寺院内墓地	『羅漢町遺跡』群埋文事業団　2011
20	真町１遺跡	平安時代水田、近世水田復旧痕、近世城郭遺構（遺構）	『真町１遺跡』高崎市教委　1996
21	旭町遺跡	平安時代水田	『高崎市内小規模埋文発掘調査概報』高崎市教委　1996
22	東町Ⅲ遺跡	弥生時代水路、古墳・平安時代・近世水田	『東町Ⅲ遺跡』高崎市教委　1994
23	東町Ⅳ遺跡	弥生時代水路・土坑、平安時代水田	『東町Ⅳ遺跡』高崎市教委　1995
24	栄町１遺跡	平安時代水田、近世溝状遺構	『栄町１遺跡発掘調査報告書』高崎市遺跡調査会　1996
25	高崎城遺跡	弥生・古墳・奈良・平安時代集落、中世堀、近世城郭遺構	『高崎城１～Ⅹ区遺跡』高崎市教委　1988～2010 他
26	浅間山古墳	円墳、径 50m、主体部不明、埴輪出土、6C?	『新編高崎市史資料編１原始古代１』高崎市　1999
27	頼政神社古墳	円墳（推）、径 20m、主体部不明、埴輪出土、6C?	『頼政神社古墳の調査』高崎市教委　1975
28	高崎市 218 号墳	円墳、径 20m、主体部不明	『新編高崎市史資料編１原始古代１』高崎市　1999
29	竜見町遺跡	弥生時代土器（中期後半標識遺跡）	『新編高崎市史資料編１原始古代１』高崎市　1999
30	城南小学校庭遺跡	縄文土器、弥生中～後期住居等	『高崎市城南小学校庭弥生遺跡』高崎市教委　1973

第Ⅳ章　基本層序

石原清水下遺跡では、Ⅰ～Ⅴ層の基本土層を確認した。このうち、主として色調などの違いによってⅡ層はａ～ｃの３層に、Ⅲ層はａ、ｂの２層にそれぞれ細分されるが、基本的には連続した同じ層位である。

Ⅰ層は現表土で、おそらく現畑耕作土の部分と宅地整地土の部分があると思われる。Ⅱ層は基本的には礫及び灰色砂を含む褐色のシルト層であるが、暗褐色で砂質のⅡa 層、黒褐色で粘質のⅡb 層、褐色で砂質のⅡc 層に細分される。大きくは調査区の西側にⅡa 層、中央部にⅡb 層、東側にⅡc 層が認められる。本層の上面が調査面である。Ⅲ層は基本的に礫を含む黒褐色粘質土であり、含まれるシルトブロックが黄灰色を呈すⅢa 層、含まれるシルトブロックが褐灰色のⅢb 層に細分される。大きくは調査区の西側及び中央部にⅢa 層が、東側にⅢb 層がそれぞれ認められる。Ⅳ層は礫及び褐灰色シルトブロックを含む黒褐色粘土である。Ⅴ層は褐灰色～褐色のシルトブロックを含むオリーブ黒色粘土である。

視認による観察では、Ⅰ層～Ⅴ層のいずれにも県下で認識されている示標テフラを確認することができないことから各層の詳細な年代は不明であるが、Ⅱ層から８世紀末～９世紀初頭の土師器甕片及び縄文土器片が、Ⅲ層から縄文土器片がそれぞれ出土していることから、Ⅱ層は縄文時代～古代、Ⅲ層は縄文時代の可能性が高いものと考えられる。



基本土層

Ⅰ　層　表土　オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y4/3）。礫φ１～3cm 少量含む。

Ⅱa　層　暗褐色砂質シルト（10YR3/4）。礫φ0.5～2cm 少量、灰色砂少量含む。しまり強。

Ⅱb　層　黒褐色粘質シルト（10YR3/1）。礫φ0.5～5cm やや多く、灰色砂少量含む。しまり強。

Ⅱc　層　褐色砂質シルト（10YR4/4）。礫φ0.5～2cm 少量、灰色砂少量含む。しまり強。

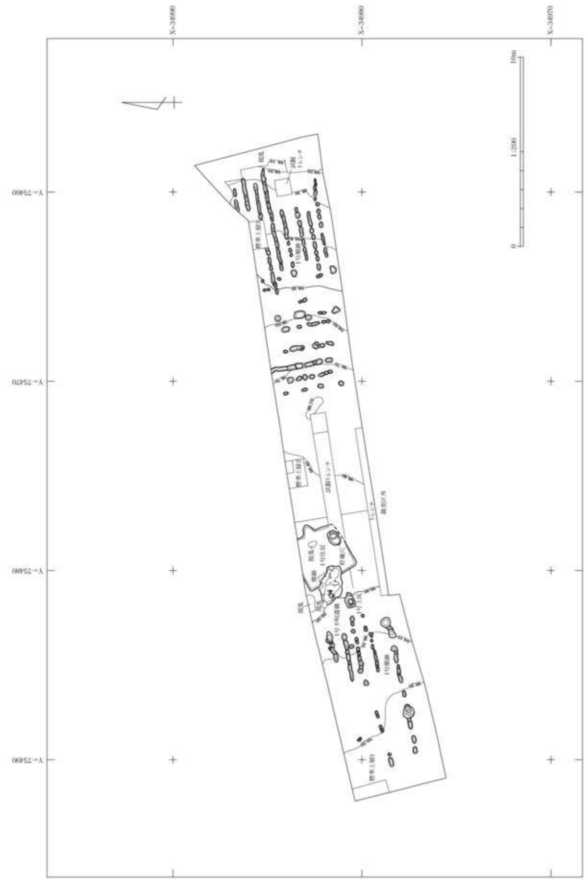
Ⅲa　層　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）。礫φ0.5cm 少量、黄灰色シルトブロックやや多く含む。しまりやや強。

Ⅲb　層　黒褐色粘質土（10YR3/2）。礫φ0.5cm 少量、褐灰色シルトブロックやや多く含む。しまりやや強。

Ⅳ　層　黒褐色粘土（2.5Y3/1）。礫φ0.5cm 僅か、褐灰色シルトブロック少量含む。しまりやや強。

Ⅴ　層　オリーブ黒色粘土（5Y2/2）。褐灰色シルトブロック僅か、褐色砂質シルトブロック僅かに含む。しまりやや強。

第５図　基本土層柱状図



第６図　遺構全体図

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

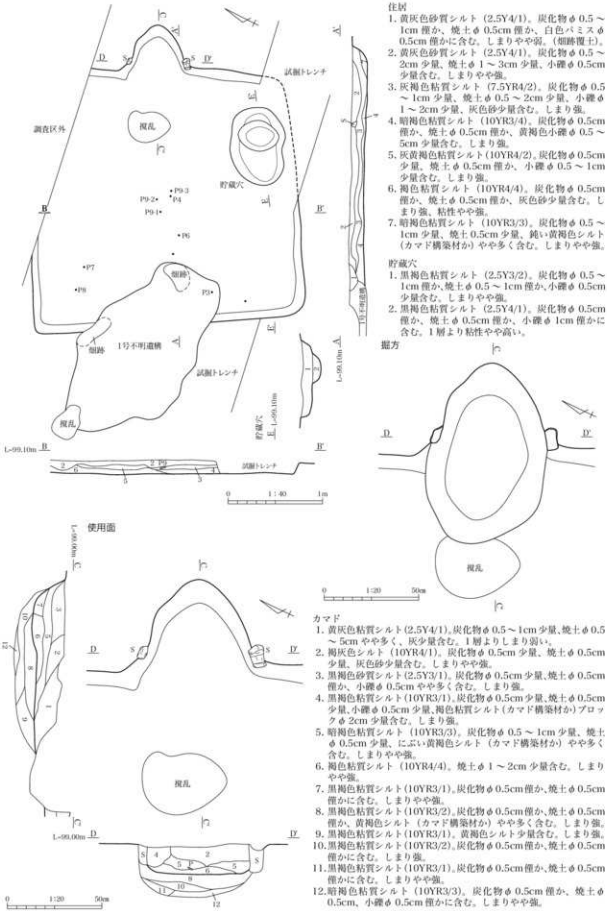
本調査で確認された遺構は、平安時代の竪穴住居（SI）１軒、土坑（SK）１基、不明遺構（SX）１基及び、近世の畑跡（SY）１面である。確認された住居が１軒のみであることから集落の様相に言及することは難しいが、この住居には近接した年代の不明遺構が重複することから、おそらく調査対象地の周辺には竪穴住居及び不明遺構の年代に平行する時期の遺構が存在する可能性がある。また、近世の畑跡は畝間の痕跡を埋める土壌に天明三年（1783）降下の浅間Ａ軽石（As-A）と思われる白色軽石を含むことから、天明三年以降の所産と考えられる。

出土遺物の主なものは、竪穴住居、土坑、不明遺構から出土した平安時代の土師器、須恵器で、他に不明遺構の覆土上部から出土した中世の在地系土器（内耳鍋）、畑跡から出土した陶器、在地系土器（焙烙）、遺構外出土の縄文土器片２点（加曽利Ｅ式）、平安時代の土師器甕片１点がある。なお、遺構外出土の平安時代の土師器甕は、竪穴住居及び不明遺構出土の土師器甕などとはやや年代的な差が認められる。また、不明遺構の覆土上部から出土した中世の在地系土器は、この年代に帰属する確実な遺構が確認されていない。

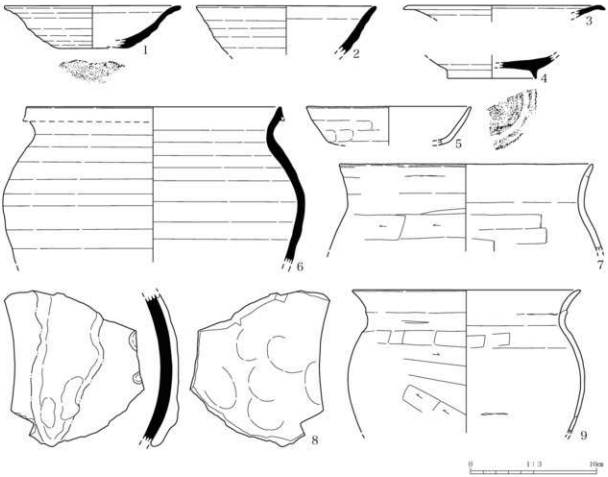
（１）竪穴住居（SI）

SI01（第７・８図　第３表　PL. ５・７）

位置　調査対象地の中央より西側に位置する。**立地**　西側から東側にかけて約３％の勾配で傾斜する緩斜面に、東西軸を等高線に直交する形で立地する。**形状・規模**　住居の北東隅は調査区域外で、西壁の南側から住居南東隅にかけては試掘トレンチで失われている。このため確認できた住居のコーナーは北西隅と南西隅のみであるが、南北軸 2.8 m（推定）、東西軸 2.7 mのほぼ正方形を呈す。**面積**　7.8㎡（推定、カマド除く）。**方位**　住居の東西軸線の傾きはＮ-61°- Ｅ。**覆土**　基本土層のⅡ・Ⅲ層に比較的近似した、灰～褐色のシルト層で埋没する。覆土内に示標テフラ層は確認できない。**壁・壁周溝**　平均的な壁高は約 15cm で、僅かな傾斜をもってしっかりと掘り込まれる。いずれの壁にも壁周溝は確認できない。**床面**　住居の西壁部中央付近は不明遺構に壊されて確認できないが、確認できた床面は全体的に平坦で整っている。特に踏み固められて硬化した部分は認められない。貼床はなく、掘り込んだ基盤層をそのまま床面とする。**柱穴**　壁内に主柱穴は確認されず、壁外にも柱穴の痕跡は確認できない。カマドの西側に位置する長軸 45cm、短軸 35cm、深さ８cm の小穴は、土層断面から後世の掘り込みと判断した。**カマド**　東壁の中央部に設置する。焚口部の幅 60cm、奥行き 50cm で、燃焼部は半円形状に壁外に造り出し、壁内に袖部はない。焚口部の両側を長さ約 10cm、幅約７cm、高さ 14cm 以上の砂岩の切石で補強する。向かって右側の切石は両小口面を欠損しているが、他の４面はほぼ平坦に加工されている。火床は奥壁から焚口部手前の床面にかけて長軸 1.0 m、短軸 60cm、深さ 10cm の楕円形状に掘り込み、黒褐色粘質シルトで埋め戻して使用面とする。切石の補強材を除いて全体に強く焼けた面はなく、覆土中に焼土も少ない。煙道は確認できない。**貯蔵穴**　住居の南東隅付近に設置する。長軸 85cm、短軸 60cm、深さ 10cm の楕円形状で、東側が長軸 40cm、短軸 30cm、深さ 10cm のピット状に掘り込まれる。**遺物**　住居中央部付近の床面直上から土師器甕、須恵器高台付皿・壺、住居北西部の床面直上から土師器甕、須恵器甕、貯蔵穴内から土師器坏、覆土内から須恵器坏が出土した。**重複**　住居の西壁部で不明遺構（SX01）と重複する。土層断面の所見から SI01 → SX01 の順で新しいが、各遺構に伴出する土器の型式には僅かな時間幅が認められ、土器型式からの新旧関係は判然としない。**所見**　東壁にカマドを付設する一辺約 2.8 mの小型住居で、伴出土器から９世紀後半の所産と考えられる。遺構外のⅡ層から土師器甕が出土していることから、調査対象地の周辺にはこの住居の年代に近接した９世紀代の住居が存在する可能性が高い。



第7図　SI01 平・断面図

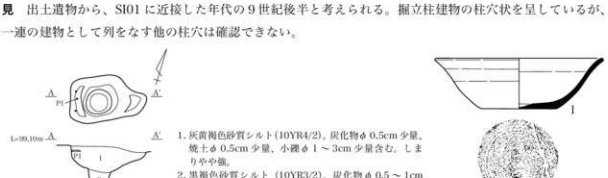


第８図　SI01 出土遺物図

（２）土坑（SK）

SK01（第９図　第３表　PL. 6・7）

位置　調査対象地の中央より西側で、SI01 の西側に位置する。**立地**　西側から東側にかけて約３％の勾配で傾斜する緩斜面に、長軸を等高線にほぼ直交する形で立地する。**形状・規模**　基本形は長軸 60cm、短軸 50cm の長方形であるが、東辺の南側が長さ 20cm ほどの半円形状に張り出す不整形状を呈す。遺構の中心部は直径 30cm、土坑上面からの深さ 45cm の円形に掘り込まれる。**方位**　長軸の傾きはＮ-68°- Ｅ。**覆土**　灰黄褐色～黒褐色の砂質シルトで埋没する。**遺物**　覆土の上部から須恵器坏が出土した。**重複**　なし。**所見**　出土遺物から、SI01 に近接した年代の９世紀後半と考えられる。掘立柱建物の柱穴状を呈しているが、一連の建物として列をなす他の柱穴は確認できない。



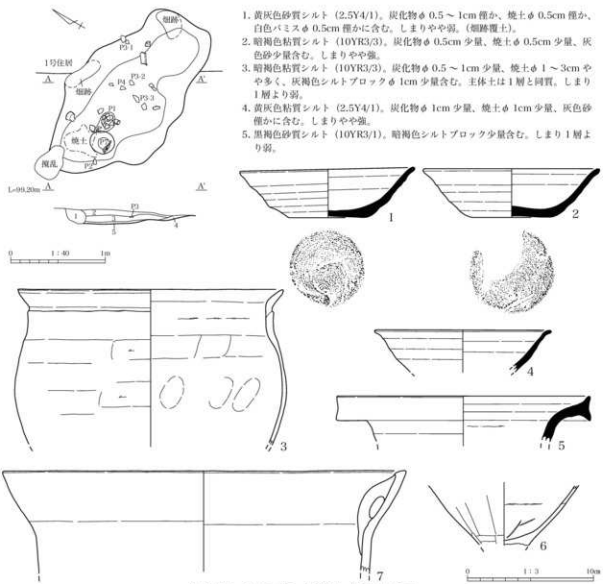
1. 灰黄褐色砂質シルト（10YR4/2）。炭化物φ 0.5cm 少量、焼土φ 0.5cm 少量、小礫φ 1 ～ 3cm 少量含む。しまりやや強。
2. 黒褐色砂質シルト（10YR3/2）。炭化物φ 0.5 ～ 1cm 少量、焼土φ 0.5cm 少量、小礫φ 0.5cm 少量含む。1 層よりしまり弱。

第９図　SK01 平・断面図・出土遺物図

（3）不明遺構（SX）

SX01（第10図　第3表　PL. 6・7）

位置　調査対象地の中央より西側で、SI01に重複する。**立地**　西側から東側にかけて約3％の勾配で傾斜する緩斜面に、長軸を等高線に対して斜めに傾ける形で立地する。**形状・規模**　長軸2.2 m、短軸1.2 m、深さ15cmの不整形状を呈す。**底面**　全体的に緩やかな起伏をもち、平坦な面はない。特に踏み固められて硬化した部分も認められない。遺構の西側に直径25cm、底面からの深さ10cmの小ピットを確認した。**方位**　長軸の傾きはN -106°- E。**覆土**　粘質・砂質のシルトで埋没する。**遺物**　遺構中央部の底面直上付近から土師器甕、須恵器坏・壺が出土した。覆土の最上位から出土した在地系土器内耳鍋は、混入の可能性が高い。**重複**　遺構の東側で竪穴住居（SI01）と重複する。土層断面の所見からSI01 → SX01の順で新しいが、各遺構に伴出する土器の型式には僅かな時間幅が認められ、土器型式からの新旧関係は判然としない。**所見**　出土遺物から、SI01に近接した年代の9世紀後半と考えられる。平面形が不整形で底面も整っていないことから、遺構の性格は不明である。伴出する在地系土器内耳鍋（7）は中世の所産で、覆土上位からの出土であることから混入と判断した。

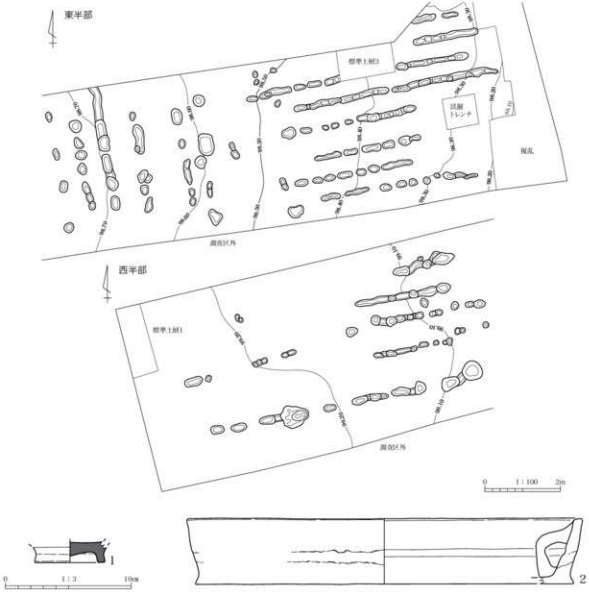


第10図　SX01平・断面図・出土遺物図

（4）畑跡（SY）

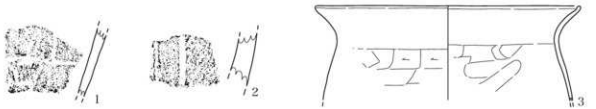
SY01（第11図　第3表　PL. 6・7）

位置　主として調査対象地の東半部と西半部の2か所に確認した。**検出**　畝及び畝間の起伏はなく、調査面のⅡ層上面で畝間の痕跡を溝状に検出した。**立地**　西側から東側にかけて約3%の勾配で傾斜する緩斜面に、東半部の西側に位置する一群は等高線に平行する方向に、東半部の東側及び西半部の一群は等高線にほぼ直交する形でそれぞれ立地する。**規模**　平均的な畝間の痕跡は幅15cm、深さ10cmで、楕円形状の掘削痕が連なって溝状を呈さない部分も認められる。畝間の芯々間隔は50cm～1.0mで、底面には鍬状の農具による連続した楕円形状の掘削痕が認められる。**走行**　畝間の痕跡の軸線は東端部と西半部がN-80°-E、東半部西側がN-9°-W。**耕作土**　耕作面は削平されて確認できないが、畝間の痕跡を埋める土壌に天明三年(1783)の浅間A軽石（As-A）と思われる白色軽石を含むことから、耕作土はAs-A軽石を鋤込んだシルト質の土壌と考えられる。**遺物**　陶器碗及び在地系土器焙烙が出土した。**重複**　無し。**所見**　畝間の痕跡を埋める土壌にAs-Aと思われる白色軽石を含み、出土遺物がいずれも18世紀代であることから、天明三年以降の近世の所産と考えられる。東端部と西半部の一群は軸線の傾きが一致し、東半部西側の一群はこれらにほぼ直交する軸線であることから、中央の空白部を挟んだ一連の畑跡の可能性も考えられる。



第11図　SY01平面図・出土遺物図

（5）遺構外出土遺物（第12図　第3表　PL. 7）



第12図　遺物外出土遺物図

第3表　出土遺物観察表

竪穴住居 (SI01)

※（　）：推定値　＜　＞：残存値

№	種　別 器　種	出土ベル (cm)	法量 (cm)	①焼成　②色調 ③胎土	成・整形技法の特徴	残存状態 備　考
1	須恵器 坏	覆土	口：(13.3)　底：(5.6)　高：3.4	①還元（燻し）　②黒褐色 ③白・黒色粒、長石	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	口縁部～底部 1/4
2	須恵器 坏	覆土	口：(14.2)　底：－　高：<3.8>	①還元　②灰黄色 ③白色粒	体部ロクロ整形。	口縁部～体部 1/5
3	須恵器 高台付皿	床±0	口：(14.0)　底：－　高：<0.9>	①還元　②灰色 ③白色粒、角閃石	口縁部ロクロ整形。内面自然釉。	口縁部 1/4。№4と同一個体の可能性
4	須恵器 高台付皿	床＋7.0	口：－　底：(7.0)　高：<1.5>	①還元　②黄灰色 ③白・褐色粒	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	底部 1/4。№3と同一個体の可能性
5	土師器 坏	貯蔵穴覆土	口：(12.9)　底：－　高：<3.0>	①普通　②鈍い黄橙色 ③褐・黒色粒	外：口縁部～体部ヘラナデ後ナデ。 内：口縁部～体部ナデ。	口縁部～体部 1/4
6	須恵器 壺	床＋10.7	口：(20.0)　底：－　高：<12.5>	①還元　②褐灰色 ③白・黒色粒、石英、長石	口縁部～体部ロクロ整形。	口縁部～体部 1/4
7	土師器 甕	床＋4.1	口：(20.0)　底：－　高：<6.8>	①普通　②橙色 ③白・黒・褐色粒	外：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	口縁部～胴部上位破片
8	須恵器 甕	床＋3.7	口：－　底：－　高：<12.1>	①還元　②黒褐色 ③白色粒	外：自然釉付着により不明。 内：ナデ、当て具痕。	胴部破片　外面溶着物付着
9	土師器 甕	床＋3.2～6.3	口：(18.0)　底：－　高：<11.3>	①普通　②鈍い褐色 ③白色粒、角閃石	外：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	口縁部～胴部中位 1/8

土坑 (SK01)

1	須恵器 坏	底＋9.6	口：(13.2)　底：6.0　高：4.0	①還元　②灰黄褐色 ③白・黒・褐色粒	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	口縁部～底部 1/2

不明遺構 (SX01)

1	須恵器 坏	底＋7.1	口：13.8　底：6.0　高：3.8	①還元　②黄灰色 ③白・黒色粒、石英	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	ほぼ完形
2	須恵器 坏	底＋9.7	口：13.9　底：6.4　高：3.8	①還元　②灰色 ③白色粒、角閃石	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	口縁部～底部 3/4
3	土師器 甕	底0～＋11.7	口：(21.0)　底：－　高：<12.3>	①普通　②橙色 ③白色粒、角閃石	外：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、指頭痕。	口縁部～胴部中位 1/5
4	須恵器 坏	底＋1.1	口：(14.0)　底：－　高：<3.3>	①還元（燻し）②黒褐色 ③白色粒	体部ロクロ整形。	口縁部～体部 1/4
5	須恵器 甕	覆土	口：(20.0)　底：－　高：<4.0>	①還元　②灰黄色 ③白・褐色粒	口縁部～頸部ロクロ整形。	口縁部～頸部 1/8
6	土師器 甕	底0～＋11.7	口：－　底：－　高：<4.2>	①普通　②赤褐色 ③白色粒、角閃石	外：胴部ヘラケズリ。 内：胴部ヘラナデ。	胴部下位～底部 底面剥離
7	在地系土器 内耳鍋	底＋18.9	口：(32.0)　底：－　高：<8.0>	①普通　②黄橙色 ③白色粒、石英、角閃石	内・外：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部破片　15C

畑跡 (SY01)

1	陶器 碗	覆土	口：－　底：5.5　高：<1.2>	①普通　②釉：褐色 胎土：鈍い黄橙色	ロクロ整形。内面施釉、外面鉄化粧。高台端部無釉。瀬戸・美濃。	高台部 1/2 17～18C
2	在地系土器 焙烙	覆土	口：(31.0)　底：(30.0)　高：5.1	①普通　②鈍い褐色 ③白・褐色粒、角閃石	内・外：体部～底部ナデ。	口縁部～底部破片 17C

遺構外出土遺物

1	縄文土器 深鉢	Ⅱ層	口：－　底：－　高：<4.7>	①普通　②明赤褐色 ③白・黒・褐色粒	外：沈線文、縄文原体不明。 内：ナデ。	胴部破片 加曽利E式
2	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口：－　底：－　高：<4.1>	①普通　②明赤褐色 ③白色粒、角閃石、石英	外：沈線文、L R縄文。 内：ナデ。	胴部破片 加曽利E式
3	土師器 甕	Ⅱ層	口：(21.0)　底：－　高：<7.5>	①普通　②鈍い橙色 ③白・黒色粒	外：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	口縁部～胴部上位 1/6

第VI章　調査の総括

石原清水下遺跡の継続年代について

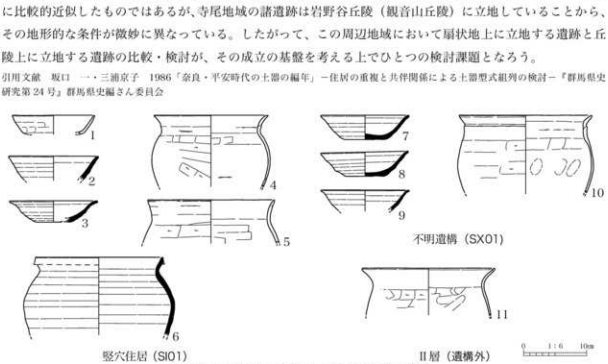
本遺跡では平安時代の竪穴住居（SI01）・土坑（SK01）・不明遺構（SX01）、近世の畑跡（SY01）を確認した。このうち竪穴住居と不明遺構は重複しており、土層断面から竪穴住居→不明遺構の順で新しいという所見を得ている。しかし、両者に伴出する土器を検討すると（第13図1～10）、土師器甕の「コ」の字状を呈する口縁部の形状及び、須恵器坏の彎曲気味に開く体部の状況などに明確な型式差を認めることができないことから、両者は極めて近接した年代の所産と考えられる。

さて、これらの土器群は、平底と推定される底部で体部が直線的に開く土師器坏、口縁部が「コ」の字状及びやや崩れた「コ」の字状を呈す土師器甕、体部が彎曲気味に開き口唇部が僅かに外彎する須恵器坏などの形状から、群馬県下における奈良・平安時代の土器の編年（坂口他 1986）のⅨ～Ⅹ段階に比定でき、概ね9世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

一方、本遺跡の基本土層Ⅱ層からは、遺構には伴わないものの土師器甕の口縁部破片が出土している（第13図11）。この甕は小破片ではあるが口縁部が比較的緩やかな「く」の字状に外反し、胴部の膨らみが比較的少ないものと推定され、先の編年のⅥ～Ⅶ段階に比定されるものと考えられる。したがって、この土師器甕は8世紀末葉～9世紀初頭に位置付けられ、竪穴住居及び不明遺構に先行する年代の所産であると言えよう。以上の資料から、本遺跡の平安時代では9世紀後半の遺構のみを確認するに留まったが、調査対象地の周辺及び近接する範囲では、少なくとも8世紀末葉頃から9世紀代にかけて継続する集落が存在する可能性が高いものと考えられる。

烏川の右岸地域に位置する本遺跡の周辺地域においては、奈良・平安時代の遺跡分布が極めて限られており、この遺跡の周辺で当該期の遺跡が分布するのは南方1km付近に位置する寺尾地域の寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、寺尾館台・寺尾左近遺跡、石原鶴辺団地遺跡などである（第4図）。本遺跡の継続年代はこの地域に比較的近似したものではあるが、寺尾地域の諸遺跡は岩野谷丘陵（観音山丘陵）に立地していることから、その地形的な条件が微妙に異なっている。したがって、この周辺地域において扇状地上に立地する遺跡と丘陵上に立地する遺跡の比較・検討が、その成立の基盤を考える上でひとつの検討課題となろう。

引用文献　坂口　一・三浦京子　1986「奈良・平安時代の土器の編年」－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－『群馬県史研究第24号』群馬県史編さん委員会



第13図　石原清水下遺跡　平安時代出土遺物図

写　真　図　版

調査区遠景（東から、岩野谷丘陵方面を望む）

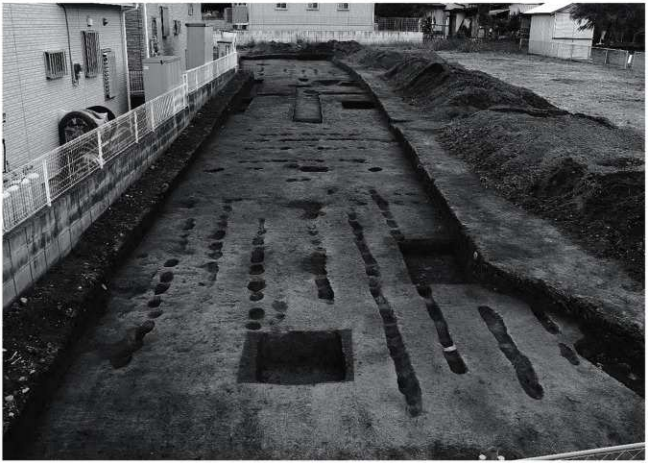
調査区遠景（南西から、鳥川・高崎市街地方面を望む）

調査区全景（写真右方が北）

調査区全景（写真上方が北）

調査前現況（東から）

調査前現況（西から）



調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

SI01 土層断面（西から）

SI01 遺物出土状況（西から）

SI01 遺物出土状況（北から）

SI01 カマド土層断面 B（西から）

SI01 使用面全景（西から）

SK01 土層断面（南から）

SK01 全景（南から）

SX01 土層断面（西から）

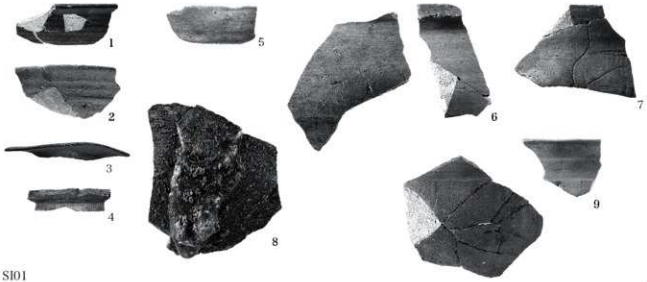
SX01 遺物出土状況（西から）

SX01 遺物出土状況（南から）

SX01 全景（南西から）

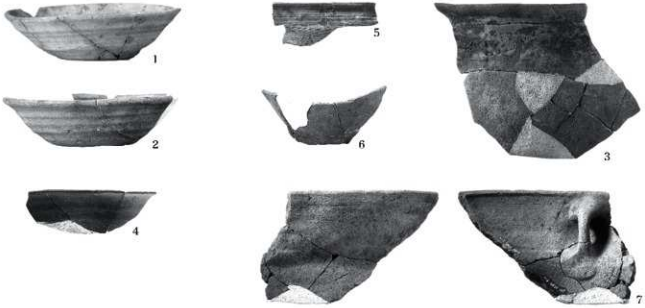
SY01 東半部全景（東から）

SY01 西半部全景（西から）



SI01

SK01



SX01

SY01

遺構外

出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	イシハラキヨミズシタイセキ
書名	石原清水下遺跡
副書名	分譲住宅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 343 集
編著者名	田口一郎・福嶋正史
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135　群馬県佐波郡玉村町板井 311-1
発行年月日	2015 年 3 月 31 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
イシハラキヨミズシタイセキ 石原清水下遺跡	タカサキシイシハラマチ 高崎市石原町 アザキヨミズシタ１９９９バンチ・ 字清水下 1999 番地・ ２００１バンチ１ 2001 番地１	102024	613	36° 18′ 44″	138° 59′ 34″	2014.10.27 ～ 2014.11.05	181.42㎡	分譲住宅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石原清水下遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡　１軒 土坑　１基 不明遺構　１基	土師器・須恵器	
	畑跡	近世	畑跡　１面	陶器・在地系土器	
要　約	高崎市街地の西側に位置する岩野谷丘陵（観音山丘陵）に接した扇状地上に立地する遺跡で、平安時代の竪穴住居・土坑・不明遺構、近世の畑跡を確認した。このうち平安時代については、遺構外出土遺物を含めると８世紀末葉から９世紀にかけて継続する可能性があり、発掘調査例の少ない近接地域における遺跡の分布状況に示唆的な資料を提供した。				

石原清水下遺跡

－分譲住宅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成 27 年 3 月 27 日　印刷

平成 27 年 3 月 31 日　発行

編集・発行／株式会社横尾材木店

株式会社シン技術コンサル

高崎市教育委員会

印　　刷／細谷印刷有限会社